

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	現代日本の建築家の設計論にみられる時間認識
Title(English)	
著者(和文)	大嶽陽徳
Author(English)	Akinori Ootake
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10203号, 授与年月日:2016年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:奥山 信一,屋井 鉄雄,安田 幸一,那須 聖,藤田 康仁
Citation(English)	Degree:, Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10203号, Conferred date:2016/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

報告番号	乙 第 号	学位申請者	大嶽 陽徳	
論文審査員	氏 名	職 名	氏 名	職 名
	主査 奥山 信一	教授	藤田 康仁	准教授
	屋井 鉄雄	教授		
	安田 幸一	教授		
	那須 聖	准教授		

本論文は、「現代日本の建築家の設計論にみられる時間認識」と題し、以下の6章で構成されている。

第1章「序論」では、研究の意義、資料、方法、および論文の構成、概要を位置付けた上で、本論文が設計思想を構想する際に基盤となる重要な概念である時間認識を検討するものであり、さらに、そうした時間認識が、建築家自身の内面的テーマとして構想されるもの、社会的に共有された外面的テーマとして構想されるもの、および双方のテーマに関わるものの3つに大別して捉えられ、それらは、連作、記念館建築、増改築建築といった題材で見出すことが可能であることを指摘し、現代日本の建築家による上記3つの題材の設計論を資料としてそれぞれの時間認識の内容と特性を捉えるとともに、それらを相互に比較・検討することで、現代日本の建築家の時間認識に関する思考の枠組みを明らかにすることが本論文の目的であると位置付けている。

第2章「増改築建築の設計論にみられる時間認識」では、内面的テーマおよび外面的テーマの双方に関わる時間認識が、建築の設計を取り巻く環境の変化と、それに対していかにデザインを位置づけるかという『時間モデル』で捉えられることを明示した上で、これらの関係を検討している。その結果、環境の変化に関する意味内容は、生活、社会、都市・農村、自然といった4つのカテゴリーで把握でき、『時間モデル』は環境の変化に対して特定の状態を維持する持続と新しい状態を目指す更新という対立概念、および環境の変化にともなって理想的な状態に漸近させる収束という概念で位置付けられ、生活と更新、および社会と持続が強く関連して論じられることを明らかにしている。

第3章「連作に関する設計論にみられる時間認識」では、内面的テーマとして構想された時間認識が、一連の作品群に共通した主題に対して個々の作品相互の建築表現をどのように関係づけるかという『建築表現の関係性』と、建築表現の理想的なモデルの設定の仕方である『モデルの想定形式』で捉えられることを明示した上で、これらの関係を検討している。その結果、『建築表現の関係性』は類似性を基調とした関係、差異性を基調とした関係、および双方を均衡させた関係で捉えられ、『モデルの想定形式』は演繹的な形式と帰納的な形式で位置付けられ、演繹的な形式は差異性を基調とした関係と、帰納的な形式は類似性および差異性のそれぞれを基調とした関係と強く関連して論じられることを明らかにしている。

第4章「記念館建築の設計論にみられる時間認識」では、外面的テーマとして構想された時間認識が、記念性に関わる設計根拠から捉えられることを明示した上で、それらの意味内容を検討している。その結果、記念性に関わる設計根拠の意味内容は、記念対象を後世に伝えるといった記念性に固有の側面と、記念対象と関連した事柄への対応といった記念性に付随した側面で把握でき、ひとつの資料で複数の設計根拠が見られる場合は、記念性に固有の側面は単独で論じられるよりも、記念性に付随した側面との複合で論じられることが基調であることを明らかにしている。

第5章「現代日本の建築家の時間認識」では、第2章から第4章の検討で得られた知見を総合化することで、内面的テーマに特化された時間認識と外面的テーマに特化された時間認識の特徴を検討している。その結果、内面的テーマに特化された時間認識においては、建築表現に関して、持続的な状態への思考と更新的な状態への思考の双方がそれぞれ重視される特徴があり、一方、外面的テーマに特化された時間認識においては、対応する環境のジャンルとしては生活や自然よりも都市や社会が特化され、時間の射程としては現在性が特化される特徴があることを明らかにしている。

第6章「結論」は、以上の各章で得られた結果をまとめ、本論文で得られた知見を総括している。

これを要するに、本論文は、現代日本の建築家によって著された設計論における時間認識の内容を、建築家の内面的テーマおよび外面的テーマを基軸に分類・検討することで、現代の時間認識を巡る多様な状況を相対的に把握し、今後の建築設計を展開させる有益な指標の枠組みを提示するとともに、歴史や伝統を継承しつつ、常に現代性を求められる建築設計分野における方法論を批判的に創造するための論理的基盤を構築していることから、工学上および建築学上貢献するところが大きい。よって本論文は、博士(工学)の学位論文として十分な価値があるものと認める。